

## 口頭発表「幼稚園における飼育活動」

伊藤裕子（担当 東京都獣医師会 渡邊守都）

### 1 飼育のきっかけ

もともと、園全体でうさぎを2匹、3クラスでハムスターを飼っていたが、獣医さんと連携して、動物飼育に本腰を入れ始めたのは一年ちよつと。

飼育体験に力を入れようと思ったきっかけは「たまごっち」。死んでもリセットできるバーチャルな飼育を、じゃらじゃらと首にかけて楽しむ子ども達、園のお迎え時に、「さあ、あなたの責任で世話なさい。」と言わんばかりの顔つきで、子どもの首にたまごっちを掛けるお母さん、そんな姿を何人も見た。

園でやらなくては、と思った。

5歳児年長組で各クラス1匹ずつ、モルモットを飼育することを始める。

### 2 平成17年9月29日、モルモットが園に到着 8週齢、メス3匹 しばらく職員室で飼育、 子ども達に知らせる。

10月20日、園の環境にだいぶ慣れてきたので、昼間は保育室へ置くことにする。

まだ、触れることや飼育は始めず、見るだけ。

### 3 10月、モルモットの死

その直後の10月24日、1匹がお尻から血を流し、獣医さんに連絡。

翌25日、相次いでもう1匹が血を流す。引き取って治療していただいたが、1匹目は敢えなく死亡。死因は直腸脱。生まれつき弱かったのではないかとの診断。

死を告げ、原因を話した。泣く子どもも多く、子ども達がとてもがっかりしたのは、手に取るように伝わってきた。

10月26日、お葬式をしてくれるところに獣医さんが頼んでくれたことを話す。

まだ生きているモルモットにも触れていない内だったので触れることはさせず、担任の手に乗った姿を見てお別れをした。

2匹目は、一週間持ちこたえたが、やはり死亡。担任もさすがに子ども達には告げられず、引き続き入院していると伝える。

### 4 モルモット再び

死を告げたクラスの子どもの落胆は大きかった。1クラスがモルモットを置いている風景を羨ましそうに眺める姿を見て、「ばらぐみさんと一緒に飼おうか？」と声をかけるが首を横に振る。死んだからすぐ次にはしたくない、という思いは子ども達にもあるようだ。がしかし、やっぱり飼いたい！と思いを募らせ、子ども達と担任とが相談し、園長にお願いしに来る。「みんなの気持ちはわかったから、獣医さんに頼ん



でみるね。」と答える。

獣医師を通し、新たに2匹の8週齢のモルモットがやってきた。もう一度仕切り直し。

死を告げていないクラスには、無事退院したと伝える。良心が痛んだ。もちろん打ち明けるべきか悩んだが、期待だけ膨らませて、実際にはまだモルモットに触ったこともない子ども達だ。神様も許して下さいさるだろう。

ただ、ただ、これからの心の育ちを祈るばかりだった。

### 5 11月、飼育を開始する



11月28日、ようやく保育室に3匹が揃う。名前は「ももちゃん」「ちわわ」「ななみ」。担任と一緒に飼育箱の掃除を始める。やりたいという子が多くいたが、順番を決めようという提案は子ども達から挙がった。掃除を終えてからモルモットを膝に乗せる姿はとても嬉しそう。

立ち上がりの出来事があったので、子ども達はとても慎重に、丁寧に世話をしていた。

## 6 12月、もりと先生に話を聞く



12月8日、もりと動物病院の渡邊守都先生から、モルモットの生態や飼育方法を解りやすくお話し頂いた。事前に子ども達は各クラスで「獣医さんに何を聞こうか？」とそれぞれの疑問を出し合い、みんなで考えれば解ることもあるし、図鑑で調べて解ることもあると、質問内容を整理した。

その、子ども達の質問の中に「どうしてモルモットは、いつもぐるぐる走り回っているんですか？」というのがあった。子ども達は質問しながらも、遊んでいるんだ！という予想を立てていたようだが、もりと先生からいただいた「それは、怖がっているんだよ」との答えに、ちょっとショックだったよう。

その2日後、保育室を互いに入れ替える「お引越し」をし、モルモットも移動したが、引越後後に一匹が下痢をした。とたんに壁には「ちわわちゃんがびっくりするからどたばたしないでね げりになっちゃうから」、etcの張り紙がそこら中、貼られていた。

5歳児になると、周囲の人だけでなく、全体に呼びかける姿が出てくる。メッセージを壁に貼るのはこの頃、ちょっとしたブームになっていた。

その後は、モルモットたちも元気で、飼育も平和な日々が続いた。

## 7 3月、年中児に仕事の引き継ぎ

3月6日、年長児から年中児へ「年長の仕事」の引き継ぎをした。モルモットの掃除の仕方や抱き方だけでなく、庭の掃き方、麦茶の運び方、共有の道具の場所など、子ども達は伝えるべきことをよく思いつく。

引き継ぎが終わってから、年中児がモルモットを自分たちの部屋へ引き取った。いつから年中さんに託すのか、年長児の間でもめたが、しっかり世話出来るようにしないといけないと結論を出し、掃除の時は、年長児が年中児の部屋へ行き、一緒に世話をすることが卒園まで続いた。

## 8 5月、新年度、もりと先生に話を聞く

5月8日、新学期も大分落ち着き、再びもりと先生にお越しいただき、新しい年長児へモルモットのお話をいただいた。

進級して間もない年長児なので、今回は質問事項を整理したりはしなかった。

子ども達はハイ！ハイ！と元気に手を挙げ、次々に質問。

「何で目が赤いの？」「何で前足と後ろ足の指の数が違うの？」「どうしてしっぽがないの？首がないの？」「何で一日に100個もうんちするの？」、etc

幼児に専門的なことを解りやすく答えることはかなり難しいことだと思うが、もりと先生は一つひとつ丁寧に、精一杯答えて下さった。

子ども達の質問の中には、今回も「どうしていつも走り回っているの？」というのがあった。やはり、今回も「モルモットから見たら、君たちは怪獣みたいに大きくて怖いんだよ」と説明を受けたが、子ども達の反応は「ふーん」と、さほどではない様子。昨年度の慎重にお世話をしていた子ども達とは違い、まだ5月という幼さもあるし、モルモットは始めから幼稚園にいた存在だからか、出会い方が違うと受け止め方も随分違う。

その代わり、昨年度の飼育の始めは「うんち、くさーい」「おしっこ、くさーい」の声が聞かれ、「みんなもうんちやおしっこするよね」と担任が声を掛ける場面があったが、今年はそれは当たり前のこととして感じているようで、「くさい」という声は出なかった。

また、もりと先生から「モルモットの食べものは野菜や果物、ヨーグルト、それと自分のうんち。まだ栄養が残っているから。」とお話をいただいたが、後日「あっ、本当にうんち食べてるー！」と発見。「きたなーい」「きたなくないんだよー、えいようがのこってるんだから」の会話が聞かれた。

昨年度の飼育はモルモットを気にとめて、とても丁寧であったが、飼育期間も短かったため、どこか腫れ物に触るような感じで終わってしまったように思う。

初めて一年を過ごす今年度、より深く飼育を進められたらと願う。

## 9 掲示コーナーのこと

昨年度、モルモットに関する出来事やいろいろな子ども達の気づきを描いて貼るコーナーを壁に作った。そしてその掲示コーナーはそのままにして新しい年度を迎え、年長の部屋に子ども達が進級してきた。

モルモットに宛てた手紙や、週末家庭飼育で小学生の兄が描いた記録など、今年も新たに重ねて貼られていった。

自分の張り紙を満足げに眺めたり、友だちの気づきを楽しそうに読み合う姿が見られた。

## 10 体重の測定のこと

昨年度は、まだモルモットたちが成長過程にあったので、毎月の体重を測っていた。

それがずっと続いていて、子ども達の身体測定の日にはモルモットも測るようになった。

飼育箱のフタに貼られた絵（「ちわわちゃんがびっくりしちゃうからちわわちゃんのまえでどたばたしないでね」と書かれている）の余白に、メモ書きのように体重をずっと書き入れていた。敢えて担任からは、表にすることを今まで持ちかけなかったが、今まで貼ってあった絵がボロボロになって取れてしまったので、壁に体重を書いて貼ろうと提案した。

幼児にとって3桁4桁の数字の大小はよくわからないが、体重の微妙な変化に、「いっぱい食べてたもんね」「背も伸びたのかも」と、推理することを楽しんでいる。

## 11 週末家庭飼育

週末家庭飼育は、全員の強制ではなく、希望者の申し出順に予約を入れていく。立ち上げる前の保育懇談会で、趣旨や方法を知らせ、昨年度は3学期から、今年度は6月から開始し、2学期末までに約半数の家庭が経験した。「久しぶりに一家揃っての話題が出来た」「子どもの優しく世話をする姿を頼もしく見ることが出来た」「親も初めてモルモットを抱き、情が湧いてきた」など、喜ばしい声をたくさん聞いた。

## 12 ダンボールのお家づくり

7月から、子ども達が自由に使える道具の一つにダンボールカッターを加えた。

最初はダンボールを切ること自体を楽しんでいたが、だんだん形あるものを作るようになり、1クラスでモルモットのおうち作りに数人が熱中するようになる。

掃除の間中、そのダンボールのおうちにモルモットを入れておくようになった。

10月下旬から園全体で造形コーナーを広くとるようになり、ダンボールのお家づくりに3クラスの子が関わるようになり、始めは半畳ほどだったものがだんだん成長して2畳ほどの大きさになった。滑り台や、テレビ、お風呂、迷路などが作られ、3クラスのモルモットと一緒に入れるようになった。決して乱暴ではないが、モルモットが迷路に入るように無理矢理お尻を押したり、滑り台を滑らせる姿も出てきて、担任はオモチャではないことをわかって欲しいと感じた。子ども達が気づききっかけはないかと探っていたが、いいチャンスを見つけれず、担任の方から「いつも隅っこの方にじっとしているね。」と話しかけた。子ども達はしばし無言だったが、「怖いのかな」という声が聞かれ、クラスの話にし、「ちわわは迷路、好きじゃないと思う。」「やっぱり自分のうち（飼育箱）がいいのかもね。」というよう



な話し合いを持った。

この出来事が子ども達にどのように影響するだろうか？

こちらから子ども達の気づきを促した形になったので、もしかすると、子ども達の気持ちが、モルモットから遠ざかるのではないかな？そんな気持ちで様子を見守った。

けれどこのことをきっかけに、モルモットに話しかける姿が増えたり、自分たちの育てた野菜を収穫した時に、「これ、モルモットも食べられる？」と聞いてきたり、避難訓練ではモルモットは誰が連れて行くかの話題が出たりなど、子ども達の世話をする顔つきがほんの少し大人びたように感じた。愛玩という段階を越えて、一步共生へと近づけたのではないかなと思いつつ、2学期を終えた。

## 13 年中、ハムスターの死



4歳児年中こあらぐみ、10月28日、重大発表をする。

クラスで飼っていたハムスターのさくらが、土曜日、担任の自宅で突然亡くなった。担任は自宅近くの動物病院を受診し、子宮系の病気が原因だと診断を受け、それを子ども達に伝えた。

子ども達の反応は予想以上に悲しみ、号泣する子どもも多くいた。

一人ずつ手のひらに乗せ、お別れをしてから、園庭の楓の木の下にお墓を作った。

その後、お墓に花やひまわりの種を供えたり、手を合わせたりする姿がぼつぼつと見られた。

10日ほど経ってから、さくらに宛てた手紙を皮切りに、さくらが遊んでいるところなどの絵を描いて見せてくれる子が何人か出てきた。たぶんこの10日間、子ども達は心の中で何らかの整理を行い、そして混沌とした悲しみの気持ちを乗り越えるために、あるいは一区切りをつけるために描画で表現をしたのではないかと思えてならない。

#### 14 年中・少のうさぎの飼育



園には元もと2匹のうさぎがいる。新学期は新入園児の心を和ませる大切な存在だが、特に飼育担当の学年やクラスは決めず、掃除は保育者が保育時間以外に行っていた。

こあらぐみの子ども達は、普段は元気に遊びながらも、ときどきお墓に花を飾ったり、「さくらちゃん、まだ土の中にいるかな？」などの声が聞かれる。死んだから次ではなく、でも、この子達にもう一度、飼育の楽しさを与えたい、との思いで、うさぎのお世話をしてくれないかと持ちかけてみたところ、子ども達は大喜びで応えてくれた。まずは、「よろしくね」と、抱くことから始めた。クラスにまたひとつ活気が出てきた。

この機会に、他の2クラスも関わりを持たせたいと思っていたところ、NPO法人からタイミング良くうさぎを飼ってもらえないか、という話が来た。これで年中1クラス1匹ずつ担当できると喜んだのだが、うさぎが園に到着した時、偶然3歳児達が玄関に居合わせ、「かわいい！抱っこしたい！」と目を輝かせて集まった。担任はその光景を見て、このうさぎを年少3歳児クラスで世話させたいと思いを強くし、結局、年中3クラスで2匹を、年少3クラスで1匹を

担当することにした。

3歳児も保育者の掃除の様子を見よう見まねで、先回りするようにやりたがる。この姿を3学期、そして来年度へとつなげていきたい。

#### 15 保育者の変化

うさぎを順番に子ども達に抱かせている時、ある子が「先生が抱くと、安心してから気持ちよさそうだね。」とぼつりと言った。私にはうさぎを抱く若い保育者の雰囲気はいつもとは違って見えた。いつもより大きく、静かな存在感を感じた。うさぎと子どものそれぞれの心の変化を察しながら、「自分がしっかり受け止めてるから大丈夫だよ、安心していいよ。」というテレパシーを、うさぎにも、子どもにも発しているように思えた。

他者の存在を丸ごと受け入れること、身をもって受け止めることは、今の時代の若い保育者にとって、特に身につけなければならない姿勢ではないかと思う。保育者の資質向上の観点からも、飼育活動を深めることに大きな期待を持った。

また、幼稚園の飼育の特徴のもう一方に、子ども達が持ち込んでくるものを、どう対応するかがある。今年は稲の栽培もあって、様々な虫を見ることが出来た。子ども達は捕まえると、好きずきにビニール袋やプリンカップに入れたりする。そして、「見て、見てー」とやってくる。保育者はその驚きや喜びに共感しながら、この虫が生きるためにはどうすればいいのか、子どもの気づきを促したり、共に考えたする必要があるが、今年はこの対応が例年よりも細やかに感じた。昨年度からの飼育体験を含め、この3年間、子どもが主体的に生活できるように保育の見直しを進めてきた成果ではないかと思う。

#### 16 アンケート結果から

集計結果について、細かなことは時間の都合上お伝えできないが、家庭ではあまり飼育が行われていない現状を知り、特にほ乳類を飼っている家庭がいかにか少ないかは予想以上で、幼稚園での飼育体験の重要性を再確認した。また、3、4歳児の保護者に対しては、動物飼育について話したことがなかったこともあり、まだまだ家庭への周知、理解を得る努力が足りないことも痛感した。今後、保護者へのアプローチを重ねていく上で、獣医さんの協力を仰ぐことが様々な場面で出てくると思う。獣医師とのよりよい連携をはかり、家庭も巻き込みながら、子ども達の健やかな成長を願い、これからも飼育活動に力を入れていきたい。

(裕学園谷戸幼稚園長)